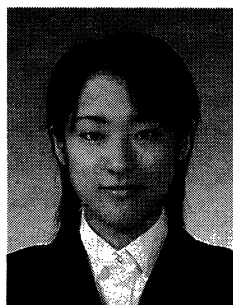


## 助産学専攻科で学んだこと

著者	前山 裕香
雑誌名	新潟県立看護短期大学紀要
巻	10
ページ	75-75
発行年	2005-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10631/554">http://hdl.handle.net/10631/554</a>

## 助産学専攻科で学んだこと



助産学専攻科8期生 前山裕香

桜の舞う時期、4月に新しい仲間と出会い、入学してからもうすぐ卒業というところまでやってきました。思い起こせば、入学してから目まぐるしく毎日が過ぎていったような気がします。毎日5限までびっしりと講義が入り、講義後も課題をする日々が続きました。また、課題と同時並行で、2グループに分かれて、病院で開催する母親学級に向けて、学校に残ることができるギリギリの時間まで準備を進めていました。その中で、友人との絆も自然と結ばれて行くと共に、助産師として求められる、相手の理解力に合わせた指導の仕方も身につけていきました。また、7月から始まる助産学実習に向け、朝の7時半には大学に登校したり、土曜日でも大学に来て、分娩介助技術演習を行っていました。そして6月には1人あたり40分間の技術チェックテストが行われ、実習で必要な技術の確認を行い、ようやく7月から実習が始まりました。実習は日中だけでなく、夜間も含め24時間を通して行われました。夜間は分娩の待機番を作り、分娩があった場合は病院から電話を受け、30分以内に病棟に上げられるように常に準備をしていました。待機の日には緊張や不安でなかなか深い眠りにつけなかったことが今では懐かしい思い出です。

今までの実習を通し、多くの産婦さんや御家族の方と出会うことができました。産婦さんとの出会いのひとつひとつが大切な思い出となり、学びとなりました。分娩に関わる上では、安全・安楽に留意すること、内診所見や分娩三要素、そして本人の訴えなど、常に五感を使って観察し、分娩進行状況の判断をすることが重要となることを学びました。また、常に相手の立場に立って援助を考え、対象となる方が産む力を最大限に発揮できるよう、リラックス効果のある足浴や

マッサージなどを行ったり、本人の希望を取り入れた援助を行うことが大切になることも学びました。初めのうちは、何を行ったらよいかの判断ができず、スタッフの方のアドバイスをもとに産婦さんと関わるが多かったのですが、分娩介助件数を重ねるにつれ、知識や技術も徐々に身につけていき、自分の考えや判断をスタッフの方に伝えることができるようになりました。

7月から12月までと、長期に及んだ実習が今終わりを迎えようとしています。正直、なんだか終わってしまうのがすごく寂しいような、ほっとしたような複雑な気持ちでいっぱいです。大切な友人、先生方、スタッフの方々と出会い、この数ヶ月間、苦しい時も辛い時もありましたが、出産の喜びや感動の場面を共有できたことは、私が今後生きていく上で大きな糧となることでしょう。

新潟県立看護短期大学は本年度を最後に閉校となってしまいますが、1年間の学びや、大切な友人たちと過ごした日々は決して忘れません。これから助産学専攻科生9名は、別々の病院で働くこととなりますが、最後の専攻科生であることに誇りを持ち、ここで学んだことを忘れず、生命の大切さを多くの方々に伝えていきたいと思います。また、対象となる方の一部分だけを見るのではなく、長い経過を根拠に基づいて総合的に判断するために、知識や技術、判断力を身に付けていきたいと思います。常に対象となる方の立場に立って考えた上で意見を発言し、必要な援助を行なうことができる助産師になれるよう日々努力していきたいです。

1年間本当にありがとうございました。